

新潟の先端研究センター



「文部省のハイテク・リサーチ・センターの助成を受けませんか？」

平成10年（1998）2月7日、愛知学院大学の小出忠孝学長から、唐突に電話が入った。彼は私立歯科大学協会長で、私は乞われて、昨年専務理事をつとめていた。「じつは予算が余っちゃって…」とごしながら、彼は「補助金は5億円ですよ！」と駄目押しした。

当時、文部省は私立大学学術研究高度化推進事業として、「平成10年度学術フロンティア推進事業及びハイテク・リサーチ・センター整備事業」をすすめていた。小出学長は、その選定委員だったのだ。思いがけない誘いに、私は迷いなく「お受けします」と即答した。東京の歯学部には共同利用研究センターがあったが、新潟歯学部はまだ整備されていなかった一天から降った絶好のチャンスだ。

翌日、事務部長の大場憲栄が、文部省の担当の助成二課に問い合わせた。公募締切が過ぎているので、来週までに研究プロジェクトのテーマを知らせよ／今月末までに構想調書（研究大綱、必要な研究機器、その費用等）を報告せよ、と否応を言わせない。冗談じゃない…あと3週間しかない！

委員会等を立ちあげている暇はない。私は、生化学教授の下村浩巳に申請業務を一任した。この有用性を察知した彼は、ただちに研究部門の策定に動

いて関連講座を取りまとめた。分子生物学部門はRI・DNA・マイクロアナライザー、口腔細胞機能部門には電顕・共焦点レーザー顕微鏡・細胞培養関連、生体材料部門にはEPMA・XPS・ICP・赤外分光時計・熱分析システム等の施設を整備する。

それらの施設は、構内の6号館1階がRI施設なので、その上に721㎡（約220坪）の2階を増築して、共用の研究施設として統合する。その増築の概略設計図を添えて、辛うじて同月27日に、50ページの申請書を文部省に提出した。

ところが、次々に厳しい時間的制約に迫られる。平成10年度の助成なので、原則、年度内に全額（5億円の半分は本学負担）決済しなければならない、と知らされた。鼻先に人參をぶら下げられて、我が方はひた走った。

4月27日に文部省の採択をうけ、9月始めには2階工事に着工し、あわせて大小の設備機器を発注した。平成11年（1999）1月中旬に、新潟歯学部の研究の拠点が竣工する。翌2月26日に「先端研究センター」の開所式が催された。小出学長の一報から、ちょうど1年後であった。

（写真：開所式のテープカット。左より教授下村浩巳，新潟歯学部長中原 泉，理事長中原 爽，学長佐藤 亨）